

まちネット会議録

2006. 2. 22 (水)

18:30~21:00

市立中央公民館 3階 講座室4

記録 長谷川 裕央

<出席者(順不同、敬称略)>

西岡数房、竹中正子、松阪正純、東山千恵、榊原敬、池阪雄宏、奥清司、西川照彦、蓑田努
谷口敏信、北山久代、西出秋雄、正ヶ峯晴美、西川英吾、西川美奈子、住田登美子、今村信彦
和田裕、長谷川裕央

<ゲストスピーカー>

谷口 敏信氏(岸和田市農業協同組合 営農総合センター)

- 地元の農協に勤めて地域の農業で給料をもらって生活している。子どものころ、将来石油や食べ物がなくなるという話を聞いた。家は農家で農学部に進み、たまたま農協の採用があつて勤め始めた。
- 農家の相談や技術指導を仕事にしてきたが、今は事務所に つめることが多くなっている。
- 昔の農業はあつて当たり前のような存在だったが、食育基本法により見直しが進んでいるのだが、夕べ、総収入約4000万円の専業農家の人と将来の農業について語り合った。
- 資料を見ていただきたいが、わが国の食糧自給率は40%。つまり10人のうち4人しか生き残ることができないと、小学校で話す機会にこう話している。かつては農業基本法があり、それが食糧・農業・農村基本法となった。
- 金額ベースにすると70%となる。つまり、値段の高い品質の高いものは国内で生産されているということ。方向を変えれば日本の農業の底力はあると思う。穀物自給率はお米を含むと61%、米だけでは90%になる。飼料を含むと30%となる。
- 大阪府だけだとカロリーベースの自給率は2%、金額ベースは7%。なお、これらの食糧自給率の統計は農林水産省のホームページに載っているので見てください。
- 国も食糧自給率を上げようとしているが、輸入は農産物・輸出は工業製品という図式になっている。片方ががんばれと言ひ、もう片方で農業を押しつぶそうとしている。
- 日本の食糧自給率は世界では100番台の低さで、先進国中でも低い方だ。ヨーロッパの食糧自給率は高い。
- そんな中で岸和田の農業は健闘している。泉南や河内は売上高が大きい。岸和田は軽い野菜が得意。重い野菜は作らなくなっている。泉佐野は白菜が多く、堺はトマトが多い。岸和田は狭い土地で何回転もさせて野菜を作っている。たけのこも良い物は高く、岸和田の良いたけのこは大阪市内の高級料亭に行く。1キロ3000円から4000円するものもある。イチジクの栽培も最近増えている。
- 女性の生産者が多く、おじいさんとお嫁さんのコンビが多いように思う。農家の支え手は奥さんが多い。かつての農家の宴会は男性しかいなかったが、今は夫婦での参加が多い。
- 市内の粗生産額(単に売り上げを集計した額。実際はそこから諸経費を引かなければならない)は27億になる。



- 第一種兼業農家は農業所得の方が多い農家、第二種兼業農家は農業以外の所得が多い農家。岸和田市内7万世帯の中で1408戸ある。
- 現在、農家で生産した野菜や果物を農協で取りまとめ出荷する事業を行っており、岸和田市内の出荷額中、水なすなど3億円を扱っている。
- かつて上松では里芋を高額で出荷していた。玉ねぎは東岸和田駅から貨車に積み込み大量に出荷していた。岸和田はどんな野菜でも作っている平均した上位生産のまち。
- 農協に勤めて26年間のうち4年間は支店で農家の集金業務を行っていたことがある。農業だけでなく生活という面からも農家の現実を知ることができた。
- これからの農業という点では、岸和田は市街化調整区域を水道道で線引きをし、山手を農業に、浜手を宅地として機能を分けている。また、土地や温暖な気候、大消費地である大阪に近く、非常に恵まれた環境にある。市内での生産と消費が共存しているまちでもある。何とか岸和田の農業が沈まないようにしていきたい。
- 市内には950ヘクタールの農地がある。1400件の農家ではもはや支えていけない状態だ。使っている面積も実際には半分くらいしかなく、もっと活用できないかと考えている。
- 農家の考え方も変わってきた。農地は、かつて今のように機械などなく、すべて人の手で作り上げてきた。その積み重ねが現在に至っている。大切に引き継がれてきた農地を、次の世代に引き継いでいきたい。
- これから団塊の世代の人たちが定年を迎える。社会問題になっているが定年になったら農業に従事してもらえたらと思っている。18年度から農家の担い手づくりの取り組みを考えている。小さな面積を多くの人たちで支えられれば、農地は支えられる。15000人が参加してくれれば、今の農地を支えることができる。
- 農地を持つということは、実は管理をし続けなければならないという相当な覚悟が必要だ。農地を持たない人にも手伝ってもらわなければ維持できない。
- また、農業をすることによって生きがい生まれる。なぜなら、農作物は実体験以外に生み出すことができないからだ。体を使わなければならない。そのことがわずらわしいと思うときもあるが、喜びを感じることもある。つらさ、苦しさを互いに味わうことで暖かい人間関係もできる。
- 岸和田を府下で元気な地域にしたい。人の奥深さを発信できるのは農業。農業の役割はたくさんある。
- 動くエネルギーの元は食糧。食べるものを生産していくのは社会貢献の一環でもある。農協もまちづくりに大いにかかわりある。



(正ヶ峯さん)

- 散髪屋をしながら地域の子どもの居場所づくりの活動に取り組んでいる。泉佐野でやっている「こーたりーな」をぜひやってほしいと思う。

(谷口さん)

- 作ったものをお金に換えられないとやりがいがない。2～3年のうちに直売所を実現したい。

(西出さん)

- 大芝でまちづくりの活動に取り組んでいる。農家は寝ている間に育ついい商売だと農業をやっている知人が話していたことを思い出した。後継者づくりにはどのように取り組んでいるのか。

(谷口さん)

- 現在は年間1万人くらい農業に就いている。一時4千人まで落ちたが盛り返している。所得保障

の基盤も出来つつある。

- まったく農地を持たない人が農業に入ってくる人が多くなっている。どちらかといえばインプット・アウトプットを仕事としてきた技術系の人が、農業のインプット・アウトプットにのめりこみ、続いていくことが多いように感じる。

(北山さん)

- 天神山在住で泉州農業応援団の一員として、まち・ざいやまちネットにもかかわってきた。直売所の実現を願う。

(東山さん)

- 葛城町在住で環境問題を中心に活動してきた。葛城町には空き地があり、いろんな農作物を作っている。「できたよ」と持ってきてくれるのはありがたいが、出来上がる時期が一時に集中することがあり、作ったものをお金に換えられるところがあれば、やりがいが大きくなるのではと感じる。
- 神於山土地改良区や春木川の汚れなど、乱れた土地が見苦しいと思う。農業にとりかかるのになどに行けばいいのか、PRしてもらえればありがたい。

(谷口さん)

- 体験してもらって理解してもらい機会を増やしたい。春菊や小松菜を植えている土地に朝日が差し込んだときのキラキラとした輝きは忘れられない。

(榊原さん)

- 葛城町在住。住んでから長いがなかなか自分の足場がないと思った。ゆう葛城の活動にかかわる中で、やっと自分の町で足元を見つめて、すばらしい人がいると感じた。38年間産業高校に勤めた後ボランティアを始めた。私も人の役に立つと思い出した。
- 葛城町ができて38年、住んでいる人たちも年を取り、病気も流行りだした。地域は運命共同体だと思う。自分のことは他人のこと、他人のことは自分のことという心境。

(谷口さん)

- 団塊の世代が定年を迎えるということが社会問題になっているが、還暦という言葉もあるように1回目の人生のリセットとして考えてもらえたらと思う。
- 農協は60歳定年で、先輩が趣味のゴルフや釣りのスケジュールをメインにしながら農業に取り組んでいる。やることがあると人生に張りが出て、顔に輝きがにじみ出ているように感じた。

(榊原さん)

- 田舎の出身なので農業の良さはわかる。

(西岡さん)

- 並松町在住で商工会議所に勤めている。商業からまちづくりを考えている。小・中学生にマネーゲームをさせるくらいなら、農工業を体験させるべき。今知人5〜6人と農地を借りて2回うまくいったら、3回目はもっといいものを作りたいと思うようになった。
- 充実したサイクルになっている。商業と農業がうまく絡めばいいと思う。

(谷口さん)

- 農業は、はまると抜けられない人が多い。最大の喜びは収穫。やはり自分の作ったものは、形がおかしくてもおいしい。

(池阪さん)

- ちょうど今、大分県の安心院の宿泊型体験農業に職員が研修に行っている。農業経営塾が、かじやまちで週1回販売している。道の駅も170号線沿い。ヨーロッパの都市のように生活スタイルを変えていくこと必要。
- 農業は「結い」が必要。ビルの林立が良いまちではない。がんばる人を支える仕事をしたい。市民全体が農業を応援したくなる雰囲気が必要だと思う。

(西川英吾さん)

- 市役所の農林水産課に勤めている。市役所に勤めて十数年。果樹のチームで実際に桃やみかんを育て、やってみないと良さはわからないと感じた。
- 担い手づくりが必要だと思う。団塊ジュニア世代は親と土に触る体験をしていない。団塊世代が孫といっしょに農業をやればいいと思う。気軽に農業に参加してほしいと思う。

(西川美奈子さん)

- 庁内の会議でまちネットの事を知った。4～5年前子育て支援のネットワークづくりの仕事を通して、谷口さんのことを知った。虐待事件の前からネットワークの必要性を訴えていたことが印象的だった。
- 山手の出身で小さな農業をおじいさんがやっていた。子どものころはあまり関心がなかったが、今になって岸和田の良さがわかった。子どもの家庭とお付き合いする中で広がっていけばいいなと思った。

(谷口さん)

- 失敗でも成功でも一歩出ることが大事だと思う。

(蓑田さん)

- 加守四丁目在住。13年位前きしわたの会に参加し、コットンカーニバル、木綿物語に発展してきた。綿づくりは5月になると雑草との競争、種植えから作ることに一貫して取り組んでいる。作った綿を製品にしてくれる業者や綿の種取りの機械をつくってくれる業者などさまざまな人のつながりができた。

(谷口さん)

- 今の話を聞いて、なぜ市の花がバラなのかがわからない。綿にしてはどうかと思う。

(蓑田さん)

- 綿の花は生け花にも使える。

(竹中さん)

- 堺町在住。環境問題に取り組んできた。
- 堺市役所で農家助成の養成もやった。神於山でいいところがあると思った。生ごみを肥料にするには農家の人との関係が必要。生ごみで作った大根、自分で作ったものに誇りをもっている。キラキラ光っている。

(谷口さん)

- 資源循環型はこれから必要になると思うが、1ヶ所に負担になることが多いので、ごみの分別や再生された資源の活用に多くの人に参加することが課題だと思う。

(竹中さん)

- コンポストは自分たちが真っ先に使うくらいでないといけない。

(谷口さん)

- 互いに合意してルールを守ることが必要。自分が住んでいる相川町は、空家が出たらすぐに埋まる。下水は完備しているが店がない、自販機がない。若い人は驚くことがあるが...

(池阪さん)

- 相川町は新たに店を作るというのではなく、まちの資源（自然、農業、風景、人とのつながりなど）を活かした「まち丸ごと博物館」への取り組みをこれから目指せば、すごく楽しいまちになるのでは。そのための材料もたくさんあるし、谷口さんをはじめ、元気な人もたくさんいる。これから頑張っって欲しいし、皆さんも応援し、注目してほしい。

(長谷川さん)

- 聞いた話だが泉州の水ナスの苗を、奈良で植えた人がうまく育たないといっていた。泉州の土地の良さを思い出した。

(和田さん)

- 山手在住、NPOで福祉系のサービスやっている。テーマ型で取り組んできた。地域という考え



が薄かった。地域で人のつながりやまちづくりができればいいなあと思う。

- 友人がNPOの小さな場でエンドウやそら豆を植えにきてくれた。今後このようなつながりを大切にしていきたい。

(住田さん)

- 実家が専業農家で後を継ぎたいと思ったが、家庭の事情で大阪へ来た。父がひとりで一丁歩の田畑を守る。誰かが帰って後を継いでくれるという夢をもち、体にムチ打って続けている。実際私が草ひきすると体に負担がかかる。
- 周囲は開発が進むが、お父さんが土地を守り続けている。どこかで農業を習いたいという気持ちはあるが、体がついていけないし、きっかけがなかなか作れずお父さんの足手まといになっている。いつかは生活の糧にしたいという情熱を持っている。

(谷口さん)

- 後継者問題はどこも同じ。農業は他の産業とまったく違う。自然は敵でもあり親友でもある。気持ちがあればできる。その土地で生活すれば自然にできるようになる。

(奥さん)

- 大芝校区在住。泉佐野の山のふもとで子どものころ過ごし、おじいさんの農業を手伝った。まち・ざいで環境部会に属した。
- 市からEM処理バケツを多くの市民が借りているが、あまり使われていないということを知った。1年間で4032キロの生ごみを堆肥化し、休耕地で大根、白菜、キャベツなどを栽培した。たくさん採れすぎて分けるのに困っている。
- 18名で楽しく小学校5年生と米作りに取り組み、食事会などで子どもに温暖化問題を話している。谷口さんが元技術職の人が農業にのめりこみやすいといっていたが、私も元電気技術職で、裏庭でたくさん作っている。

(今村さん)

- タウンウォッチングで相川町に行った際、いいところだと思った。
- 岸和田を知ることが大事だと思って、「道」という自主学习グループをつくり、内畑から岸和田まで昔の道を歩いた。
- コンピュータのネットワークが好きで、地域で人のネットワークづくりに取り組んでいる。

(西川照彦さん)

- 岡山町在住。昔に比べて畑が減ったように思う。
- 東葛城小学校での子どもたちの研究発表会を見た。子どもたちが自分たちの地域に誇りを持っていることを感じた。子どもが農業をやりたいという言葉に感動した。教育の仕方もすごいと思った。農業が好きだが、腰痛持ちなので難しいと思う。

(谷口さん)

- 農業は先代から知恵が引き継がれているので、腰痛持ちでも自分にあったものを選べばできる。
- 「充実感を持って幸せになりたい」、「自分のために一生懸命」だから農業ができる。農業の展望は明るいし、希望に満ちたもの。市も農協も積極的に農業に関心のある人を掘り起こして行きたい。

